

清朝前期の心学について

李, 鳳全
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/18139>

出版情報：中国哲学論集. 19, pp.36-53, 1993-10-10. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

清朝前期の心学について

李 鳳 全

序

本論文では清王朝の順治帝から雍正帝の時期における、いわゆる清王朝前期の心学を検討したい。この時期は明王朝が解体し、清王朝の支配システムが徐々に確立し、安定していく時期である。清王朝が前の王朝と異なる重要な点は、異民族王朝として中国を支配したということである。政治的、軍事的に中国を支配すると共に、思想文化ないし経済の面において漢民族の文化伝統をどのように利用するか、そして漢民族の知識人をどのように支配するかということが重要な問題であった。

一方、心学を中心とする明代思想文化は清朝にも流れこんだ。明代心学つまり王学は、本心への集約を思惟傾向としてもち、「心の本体は万理具足」を基本理論とし、主体性の確立をめざす哲学思想である。そして「良知は人々皆具う」から「人々皆具うるは良知」への展開過程には、「社会の進歩思想をある程度肯定することと社会の既存形態をある程度否定すること」⁽²⁾も現実化した。この過程において特に注目されるのは左派王学で、王学の主体性の確立についての思想を無制限に拡大し、いわゆる横流を生ずることにもなった。このことはいかなる中央集権王朝に対しても大いなる脅威であり、異民族として中国を支配する清王朝は最も警戒感を持ったのである。

本論文は新しい王朝——清王朝の支配者が心学に対してとった姿勢及びこの時の心学者のあり方を検討しながら、心学の特性について考察しておきたい。また、心学史の広い範囲から検討すれば、心学派そのものはその最終段階いわゆる終焉を迎えたが、「民族全体の精神的な富の一部として積み重ねられた。」⁽³⁾従って、清王朝前期の心学を心

学史の一発展段階として研究することは、心学史と心学研究史に対して重要なことと考えられる。

一、清王朝の二重性格

清朝前期、順治帝（在位一六四四～一六六一）は一六四四年北京に入ってから、清王朝の中国を支配し始めた。順治帝在位の一八年間、清王朝の「八旗軍」により中国全土（雲南・福建など個別の地方のほか）を鎮圧した。康熙帝（在位一六六二～一七二二）はさらに三藩事件⁴（一六七三～一六八一）を武力で解決し、台湾を統一した（一六八三）。このように、中国は四十年経ってほぼ統一された。戦争の勝利と同時に政治支配の系統特に中央政権も固め始まった。その政治方針は勿論まず満洲貴族を始めとする満洲族の特権と利益を守ることである。国家の軍事、政治に関しての秘密の事務は漢民族の官僚らが参与できない。しかし、少数の民族が漢民族を支配するには、漢民族の官僚らの協力を得なければならぬ。これは「漢を以て漢を治む」という政策である。満洲族の支配者は満洲（今の中国東北地方）における時、降伏した漢民族の官僚、將軍を任用する方針を決めた。中国の中心部に入ってから、上の方針を継承しながら、科挙を通じて知識人を選ぶ。また清王朝の支配者は初期の議政王、大臣會議から内閣制へ、内閣制から軍機処へ移行すると共に、漢官僚らも最高機関に入った（決定権は勿論皇帝の手にある）。吏、戸、礼、兵、刑、工の六部に、滿漢尚書各々一人、侍郎各々二人があり、最終の決定権は満洲族の皇帝のところにあるが、「滿漢一体」というスローガンはやはり役に立った。

一方、滿洲皇帝は、「我が祖宗が開創以来、弧矢の利、以て天下に威し、暴を伐して民を安んじ、海内を平定す」といって軍事的、政治的な優位性と自信を強く示したと共に、モンゴルの元王朝が、元祖忽必烈^{フビライ}の中国統一から百年足らずで、滅ぼされたという教訓を汲み取った上で、自他の文化レベルの差異をはっきり見る。「漢人の学問、俱に根柢あり」（康熙起居注、二十六年五月十一日）と認識し、将来、文化の面で敗れることを危惧し、滿大臣に次のように言った。

漢人の学問は滿洲に勝ること百倍なり。朕未だ嘗て知らず。但だ皇太子の漢習に耽るを恐るのみ。漢人に任せ

ず、朕、自ずから誨勵を行ふ所なり。今、皇太子、略ぼ漢文に通じ……爾は惟だ若等（皇太子の漢人輔導官）を引いて皇太子を奉侍するのみ。導くに滿洲の礼法を以てして、漢習に染むことなければ可なり。……近く衆人及び諸王以下、その心は、皆、行獵を願わず。朕、未だ嘗て聞かず。但し、滿洲、若しこの業（滿洲の武備、八旗軍）を廃せば、即ちに漢人と為る。これ豈に國家の為に久遠を計るものならんや。文臣の中、朕の漢俗を習うことを願う者、頗る多し。漢俗、何の学び難きことか有る。一たび漢俗に入れば、即ち大いに祖、父の明訓に背く。朕、誓つてこれを為さず。……（同前、二十六年六月初七日）

以上の言葉は、次の二つの問題を表していると考えられる。

第一の点。いかなる王朝の初期と同じように、清王朝も基本政策の転機点に直面しており、つまり、武功と文治の二者の關係をどのように調整するのかがという点である。漢民族の王朝であれば、武功から文治へと変るのは、いわゆる創業の時代から守業の時代へと転換することであり、障害はないが、清朝の場合、立国の根本にある滿洲「八旗兵」の存続問題がからんでおり、妥協は困難であるとみなされる。しかし、社会が安定すると、「近く衆人及び諸王以下、その心は、皆、行獵を願わず」となるのは、人間の自然な流れである。ここで康熙帝は、「皇太子に漢習を耽る」と、滿洲の武備が弱まるなどのことを恐れるが、滿洲の文化よりレベルの高い漢民族の文化、つまり「滿洲に勝ると百倍」の「漢人の学問」に周囲を囲まれた中で、漢習に染まない、漢俗を習わないということは完全に不可能なことである。勿論、彼の言う通り、「この業（滿洲の武備、八旗兵）を廃せば、即ちに漢人と為る」。つまり、自分より百倍の量の漢民族を暴力で支配することが一番大切で、これを失えば、自分の民族さえ無くなる。康熙帝の時代にも、滿洲の武備、武力は弱体化した。この状況は雍正の即位の時に更に深刻化する。雍正帝（在位一七二三—一七三五）は言った。

爾等の家世の武功、業は騎射に在り。近多^{ちかごろ}く文職と為るを慕い、武備は漸く松弛に至る。而して文途より身に進む者は又た只だ僥幸にして名を為す。能く苦心して向学せず。日々に玩し時に愒し、就く所無きに迄ぶ。平居の時、尤も奢侈を以て相い尚ぶ。居室の容器、衣服、飲饌、紛華を備うこと極まり、靡麗に争誇せざる無し。甚しきは且つ梨園に沈湎し、博肆に遨遊す。従前の積累の維艱を念わず。向後の日用の難繼を顧ず。任意に糜費し、快を目前

に取り、彼此に效うこと尤し。その害、これより甚しきは莫し。〔清世宗実録〕卷十六、二年二月〕

このような趨勢において二つの道が考えられる。一つは自民族の文化伝統を守って、漢民族の文化伝統を完全に拒否する道である。これは元王朝の支配者の使った方法であった。もう一つは、漢民族の文化と合流して一つの文化システムになる方法であった。この選択は重要な課題であった。清の初代の皇帝順治帝は、「太祖、太宗の謨烈を能く仰法せず、因循悠悠として、目前に苟且し、且つ漢俗を漸に習う。淳樸の旧制に於いて、日々更張あり」〔清世祖実録、卷一百四十四、遺詔〕と非難されたが、実に清の前身、後金の時にも、漢民族の人々を招納し、利用し、かなり漢民族の文化伝統を汲み取ったのである。

このように見てくると、満洲族は異民族として中国を支配することについて、二重の性格をもっていた。つまり、軍事の優位性と文化の劣等感である。時間が経てば経つほど、満洲族の「八旗兵」の武備の弱体化は更にひどくなる。雍正帝の時、準喀爾との戦争では、満洲兵は、「山谷の間に避寒し、日々酒を置いて高会し、倡伎を挟めて以て樂と為す」状態で、結局、大敗した。漢人紀成斌という大將軍は嘲笑して言う、「満洲の勇、固より是くの如きか」と。〔嘯亭雜録〕卷十『岳威信始末』

一方、清王朝においては、ひたすら漢文化によって皇太子、皇子及び満洲族の子弟を教育する。康熙帝は、次のように言っている。

朕、八歳にして登極（即位）し、即ち、黽勉して学問するを知る。彼の時、我に句読を教うる者は張、林の二内侍あり、俱に明の時の多く書を読むの人に係わる。その書を教うるは、惟だ經書を以て要と為す。……朕の少年、学を好むこと此くの如し。更に筆墨を耽好す。翰林沈筌ありて素と、明時の董其昌の字体を学び、曾て我に書法を教う。……〔庭訓格言〕

皇帝に対して八歳から經書の句読を教えるのであるから、漢文化を重視していることは明白である。これは単に漢文化を好んだためではなく、むしろ中国を治める為であり、言いかえれば、文化の劣等感の性格、そして高いレベルの文化に対する警戒感が見られる。だから、どのように漢文化を利用して漢民族を治めるかが課題であった。

次に第二の点。清王朝の支配者は、漢文化に対して、自分に有利な部分と不利な部分とを分ける。有利な部分とい

うのは、清朝以前の王朝とほとんど変わらない。つまり、孔子を尊崇し、經書を聖典とすること、そして知識人の科挙の為に、程朱の注疏した經書を教科書として利用することである。問題は不利な部分にある。不利な部分というところは、勿論、他の王朝と同じく、封建専権、専制主義に反対する思想は排除の対象である。しかし、清王朝にとつては、更に「夷夏の防」、「華夷の大分」という中華思想は、最も敏感に排除敵視しなければならない対象となる。もしこのような思想、理論が発見されれば、猶予無く、すぐに取り締り、撲滅する。漢文化と比べて見れば、漢民族の知識人に対してきびしいものがあつた。清皇帝らはたまたま忠節を尽くす漢民族の知識人に利益とか、名譽とかを送るが、自分の支配に脅威を与える時、批判し、懲罰し、あるいは殺すのである。例えば、康熙帝側近の漢大臣らは、最初、「才学優長」と誉められ、しばらくして後、批判され、懲罰された。口実として、「今、漢官の内を視るに、道学の名を務むる者は甚々多し。その究意を考うるに言行皆背く」と（『康熙起居注』二十三年六月二十三日）。もし「此れ等の人に懲治を行なわざれば、則ち漢官は孰れか畏懼を知らん」と（同前、二十三年二月三日）。康熙帝の政治はただ寛厚であつたとはいへ、雍正帝の政治はより厳格であつたといえる。二人の文化政策にも相違があつた。その理由は皇帝の個人的性格とも関係があるが、最も重要なのは、時代状況の違いである。つまり全国的な平和が来たのである。平和が来ると、文化政策はゆるやかになるはずであるが、どうして反対の結果になるか。これは滿洲族が異民族として中国を支配するという二重性格と関係があると思われる。従つて、漢文化に対して利用することと排除すること、そして漢民族の知識人に対する懐柔と強硬の政策はこの二重性格の延長に外ならない。

二、康熙朝の思想文化政策について

康熙朝の思想文化政策、特に程朱理学に対する政策は、陸王心学の存亡に対して、強い影響力を持っている。といふのは、清王朝の知識人採用の方法は、「一に明制に沿う」と（『清史稿』志八十一、選舉一）ものであり、「（順治）二年、科場条例を頒す」、「首場、四書三題、五經各々四題、士子各々一經を占う。四書は朱子の集註を主とし、易は程の伝、朱子の本義を主とし、書は蔡の伝を主とし、詩は朱子の集伝を主とし、春秋は胡安国の伝を主とし、礼記

は陳澧の集説を主とす」（『清史稿』志八十三、選舉三）であったが、順治帝の時代、全国の統一はまた終わってなく、本格的な平和も来てなかった。だから、程朱の理学が学術として御用化したのは、やはり康熙帝の時代であった。康熙帝がどうして朱子学を選び、王学を選ばなかったか、という問題は意味深い。最近出版された陳祖武氏の『清初學術思弁録』（中国社会科学出版社、一九九二年六月第一版）によれば、康熙帝は主として「孔孟の書を読み、程朱の道を学ぶ」という朱子学者である日講官熊賜履の影響を受けて朱子学へ進んだという（該書、三十七〜三十八頁）。しかし、八歳で即位した康熙帝が自分で師を選択したであろうか。その時、「輒ち学庸の訓詁を以て之を左右に詢る」（『清聖祖聖訓』巻五）とあるが、これはすべて国の利益によって、小さい康熙帝に孔孟及び程朱の儒学を教育するのである。そして熊賜履が康熙十年日講官を担当する時、康熙帝は、まだ未熟の青年であった。それなら、なぜ程朱が選ばれたか。

この問題に答えるには、勿論、個人的理由という問題もあるが、これより大切なのは、朱子学と王学の各々の特性である。朱子学は政治秩序論、道德秩序論を提唱する。朱子は「仁義礼智信」と「修齊治平」との解説の中で、「今日一物に格り、明日又た一物に格り、積習既に多くして、然る後に脱然として貫通の処有るのみ」（『大学或問』）という程子の思想（『程子遺書』、第十九、伊川先生語四の言葉とほぼ同じ）を継承したり、「理一分殊」とかの哲学思想を表現した。この秩序論は、中央集権主義に対して適当な理論で、清王朝は躊躇なく採用した。宋明理学に深く関心を寄せる康熙帝は、心学の活発性及び明末の王学横流を詳知していたのであろう。満洲族の文化的劣等感から、思想支配に対して有利で安全性の高い学説を選ばなければならないという政治的判断で、康熙帝が王学を選ばずに朱子学を選ぶのは、当然である。「上、好むことあれば、下、必ず效う」ということわざは康熙朝の学術界の状況をよく説明している。

そもそも王学末流に対しての批判と反省は明末から清初まで、長い時期にわたった。清初になると、王学をそのまま保持する者はほとんどなく、以下のような方向へ転じた。^{（程朱）}（1）朱子学、王学を兼採する者、（2）朱子学、王学を兼排する者、（3）王学から朱子学へ移る者、（4）朱子学を学び王学を排する者。（1）は孫奇逢（夏峰先生）、李顥（二曲先生）などのように陸王を主とし、陸王を修正するのに、朱子学をも受け取る者である。陸王特に王学を修正する黄宗羲（梨

洲)もこの方向を歩んだ。彼には、「吾が心の是とする所、之を朱子に証すれば合するなり、之を数百年來の儒者に証すれば合するなり」(『南雷文案』卷一、「惲仲昇文集序」と、王陽明と同様の言い方があるが、章学誠(実齋)は言う、

戢山劉氏、良知を本として慎獨を發明す。朱子と合せず、亦た相い詆らざるなり。梨洲黃氏、戢山劉氏の門より出でずして、萬氏弟兄、經史の学を開き、以て全祖望輩に至りて尚おその意を存し、陸を崇びて朱に悖らざる者なり。(『文史通義』内篇卷二「浙東學術」)

あくまでも黄宗羲は朱子学を排斥しないのである。(1)は実に明末清初の王学の変型、そして王学の主流である。(2)朱子学、王学を兼排するというのは、王夫之(船山)や顔(元)李(塏)学派などである。(3)王学から朱子学へ移るというのは清初の場合、張履祥(楊園)などであり、康熙朝に入ってからはこの傾向は更に明らかであった。(4)は顧炎武(亭林)などである。

この四つの方向の中に、(2)は朱子学が御用化するとともにだんだん姿を消した。少なくとも、朝廷では、朱子学を批判することは許されない。王船山のような学者らは隱者として深山にて自分の作品を「名山に藏し、後世に伝える」とするしかない。当時の知識人の主流派はほとんど朱子学を学び王学を排する方向へ転じた。その旗手は熊賜履、陸隴其である。熊賜履は彼の『学統』の中で陸王学を儒学から排除してはいないが、実際に老、仏より悪いと批判した。該書の『学統凡例』に次のようにある。

百家の支、二氏の謬、或いは明として吾が道に畔し、顯として敵と為す。或いは陰として吾が実を亂し、陽としてその名を竊す。皆、斯の道の乱臣賊子なり。必ずこれが為にその辜を正す。吾が統を亂すことを得ざらむ。故に之を掲して雑統と曰う。不純を明にするなり。荀卿、揚雄及び象山、姚江の類の如き、是なり。異統と曰うは不同を明にすなり。老莊、楊墨及び道家、釈氏の類の如き、是なり。

ここで、陸王を老、仏のように乱臣賊子として討伐するのは、特別な政治的意義があるのである。つまり、これは康熙帝の黙認した朱子学を学び王学を排する基本方針を考えてもよい。

陸隴其は清王朝より孔子廟に従祀されるといふ榮譽を得た。彼は朱子学者として朱子を尊崇するが、思想史上の地

位は低く、梁啟超、錢穆二氏の同名異著『中国近三百年學術史』では、共に御用学者として論評されている。

熊・陸二氏が御用学者になったことは、康熙帝の時に朱子学が御用化したことを表わしている。康熙帝は、「終日に理学を講じ、行う所の事、全くその言と悖謬す、豈に之を理学と謂うべけんや。若し口で講ぜずといえども、行事皆道理と吻合すれば、此れ即ち眞の理学なり」（『清聖祖実録』卷百十二、二十二年十月）とし、理論的な討論に強く反対する。康熙帝が、実行、実用というのは、根本的に朝廷の為に誠実に勤めることを指すのである。こうなると、朱子学は、清王朝の政治支配の道具であり、徹底的に御用学問になった。

三、康熙朝の心学の状況

前節で分類した(1)と(3)は王学から出発した変型といえる。先ず、康熙帝は(1)の流派（心学の主流）に対してどのような姿勢をとっていたのであろうか。康熙帝と側近の朝臣崔蔚林との關係をみていくことにする。崔蔚林は、「命を承り、『易经講義』をつくるも、未だ書と為すに及ばずして罷む。自ずから『四書講義』を著すも亦た未だ版行せず」（『畿輔通志』卷二百三十二、列伝四十）とあるように著述を残していないから、他の資料と伝記を見る必要がある。崔蔚林の思想傾向に関しては、次の資料が参考になる。

A、「彼、三十歳前後、新安を過りて学ぶ所を杜越に商す。往復辯難し、越は猛勇精深を以て之を称す」（『清儒学案』卷一「孫奇逢夏峰先生学案」という。その中に、杜越に関してこうある。

俗学を絶して陽明を尊び、毎に羅洪先の何善先、蔣道林に答うる両書を挙ぐ。
と。杜越は王学者であった。崔氏は杜越との間に相通じる処があったと思われる。

B、彼は、「毎に周子の太極図の『動いて陽を生じ、静かにして陰を生ず。一動一静、互にその根と為る』を学び、猶お漸長の義少し。困って自ずから一図を為し、心得あるを覚ゆ。瞿塘の来の易を読むに及んで、適に相い符合す。曰く、これはいわゆる先に我が心を得、と。遂にこれを焚く」（同前）という。来瞿塘（来知徳、明萬曆翰林院待詔）は、「程子、陽明と異同ある者二端あり、謂う、格物の物は乃ち物欲の物。物格して後、知至る。克己復礼を仁と為

す。養心は寡欲より善なること莫し。この三句は乃ち一句なり。何となれば、物や、己や、欲や皆有我の私なり。格や、克や、寡や、皆有我の私を除去するなり。紫陽、是の前の一步の功夫を説き、陽明、是の後の一步の功夫を説く」〔『明儒学案』諸儒学案下〕という。彼は、また自らの学説を心学と呼ぶ。このように、来知徳の思想傾向は心学を主として朱王を折衷するものである。こうすると、崔氏の立場は来知徳と近いであろう。

C、湯斌撰の『孫夏峰先生年譜』によれば、崔は夏峰に二回学を問うたということである。その一は、康熙六年十一月で、夏峰は崔氏に言っている。「子、既に陽明を嗜むことあり。陽明と程朱と相い削して同と為す意を得んことを要す。抵牾あるにあらざるなり」と。その二は康熙十一年十一月で、崔氏は、「將に都に赴かんとし、過りて先生を視る」。夏峰は言う、「学問の事、最も偏見を恐れ、尤も勝心を忌む。……鹿江村（明末の鹿善繼、字乾長）嘗て言う、有字の書を読み、無字の理を識らんことを要す。⁽⁷⁾ 朱陸の異同、聚訟今に至り、要するに皆無字の理を識らずして多く字句の障する所と為る」（同前）と。これも朱子学、王学を兼採すると言ってもよいだろう。

以上、崔蔚林は、前に述べた清初の朱子学、王学を兼採する傾向にあるが、王学に重きを置いていると言えよう。次に康熙帝との間の出来事について検討する。

崔氏と康熙帝との談話は、『康熙起居注』には、一ヶ所見える。これは康熙十八年十月十六日の条である。（以下「崔」と「帝」と略称する）

〔崔〕……格物は是れ物の本を格す。乃ち吾が心の理を窮むるなり。朱子、解して天下の事物と作す。未だ太だ泛なるを免れず。聖学に於いて切ならざるなり。朱子、解して天下の事物と作す。未だ太だ

〔帝〕…朱子の意を解するは、字、亦た差わず。

〔崔〕…臣の講ずる所と同じからず。朱子、意を以て心の発する所と為す。臣、意を以て心の大神明、大主宰と為す。至善無悪、即ち天の命ずる所の明德、至善なり。……

〔帝〕…爾^{なんじ}、朱子の講ずる所を以て非と為すや。

〔崔〕…臣、敢えて以て非と為さず。但だ、臣の体認、既に久し。一得の愚、微や朱子と合わず。

〔帝〕…王守仁の説は如何。

〔崔〕…王守仁の致良知の三字は亦た差わず。……若しこれを以て大学の致知の二字を解すれば、却て解し去かず。……若し致知を以て致良知と為さば、則ち明善の一段の功夫を少く。

〔帝〕…爾の言に據れば、兩人の説は俱に非なるか。

〔崔〕…原より臣の意と合せず。

〔帝〕…朱子の四書を解する所は如何。

〔崔〕…四書を解する所、おおむね大概皆是なり。合せざる者惟だ教段あるのみ。

この後、『起居注』に「上領之」という言葉が見えるが、康熙帝の立場については、更に検討しなければならない。その後十日して、つまり十月二十六日に、康熙帝は、都察院左都御史魏象枢（寒松老人）と次のように討論している。

〔帝〕…天命を性と謂う。性は即ち是れ理なり。人の性は、本より善なり。但だ意は是れ心の発する所にして善あり悪あり。若し存誠の工夫を用いずんば、豈能く一蹴して至らんや。遠くに行くに邁きよりし、高きに登るに卑きよりするなり。学問は原躡もと等無し。蔚林の言う所ただ易し。

〔魏〕…蔚林の言に據れば、明善の工夫、先の一層にあり。

〔帝〕…講ずる所の格物は如何。

〔魏〕…物とは、人なりという一語の如き、臣、疑い無き能わず。臣、曾て之に面詢するに、蔚林は人己を兼ねて言うを謂う。臣、終に解する能わず。

……

〔帝〕…王守仁の学問は如何。

〔魏〕…守仁は専ら致良知を言い、良能に及ばず。是れ知を言いて行を言わざるなり。その意、致は即ち是れ行なりと謂うといえども、然れども又大学の致知の意に非ず。

〔帝〕…蔚林の見る所、守仁と亦た相い近し。

以上のことから、二つの事がわかる。第一は、康熙帝は「学問は原躡もと等無し」と考え、「蔚林の言う所、ただ易し」（安易である）と判定し、崔蔚林の学問に賛同しないと示した点である。第二は、「蔚林の見る所、守仁と亦た相い

近し」というように、康熙帝は、王陽明の学問にも賛成しないと示した。これは最初、単に學術の討論みたくであるが、その後、益々政治的意味を帯びることになる。『康熙起居注』二十一年六月初二日の条に次のようにある。

上（康熙帝）曰く、崔蔚林は如何。

大学士李蔚奏して曰く、人となり老成なり。

上曰く、朕、その人と為りを観て甚だ優せず。伊、道学を以て自居す。然れども所謂道学は未だ必ずしも是れ実ならず。其は郷に居るとき亦た甚だ好まず。

「道学を以て自居す」と「郷に居るとき甚だ好まず」の二つの理由で免職された。「郷に居る」云云は、「地方にありて好く事端を生じ、詞訟を干預す」と。また、「近く草場の土を以てその家人を縦して控告するを聞く」。『康熙起居注』二十三年二月初三日）しかし、崔氏については、『国朝耆献類微初編』に次のようにある。

先生の学、誠を以て本と為す。事親居官より朋友と接するに及び、一つの誠を本とせざること無し。義利の辨に於いて甚だ厳し。（卷百十六詞臣二、徐元文撰の墓誌銘）

と。だから、何かあっても、必ずしも悪人とみなすわけではないが、康熙帝は、崔の病氣の時、見舞いの名目で、「甚だ重病無きが似し」と断定した。「道学を以て自居す」と「郷に居るとき甚だ好まず」と同じく、「焉ぞ道学の人にして輿訟を妄行する者あらんや」と繰り返した。「又た先賢を詆りて経伝を釈す所を差謫と為し、自から講章を撰して甚だ謬戾を属す」（以上、皆『康熙起居注』二十三年二月初三日）と。こうなると、學術の討論から始まって「先賢を詆る」という政治的口実によって罪せられた。康熙帝は、「彼の疾を引くは乃ち是れ託詞なり」と指摘し、その後続けて、「崔蔚林の好事（おせっかい）の如き、郷に居るとき不善なり」（同前、二十三年六月二十三日）とか、「崔蔚林の如き、本より知識無く、文義荒謬なり」（同前、二十四年四月初二日）とか批判した。崔は免職されてから三年後五十三歳で病死した。

それでは、この「生まれながら性、殺戮を最も忌む」（『庭訓格言』）という皇帝は、崔蔚林に対する批判を通じて、前に述べた(1)の学派、つまり王学を信じている者ないしは王学の傾向がある漢大臣を懲罰しようとしたことがわかる。これは學術を越えた政治問題であり、清王朝支配者の二重性格の表われでもある。

次に(3)の学派を見てみよう。

清初期、張履祥のような一部の学者は、自ずから朱子学へ転じた。康熙朝、朱子学が御用化・政治化されてから、大勢の学者は朱子学、王学を兼採する傾向から朱子学を獨尊する傾向へ変った。

『王学質疑』を書いた張烈は、「初め陽明の学を嗜み、後にその誤を知り、専ら朱子の家法を守り、毅然として衛道を以て己が任と為す」(『清儒学案』卷二十三、張烈致堂学案)という。彼は、「本朝、文体を釐正して朱註復興す。講者、周程張朱を称して仍お王陸と並列するは、亦た習氣未だ尽きざるなり」(『王学質疑』自序)とし、そして「浮を黜し異を屏け」(同前、朱陸異同論)、「文教を鼎新す」(同前、讀史質疑)るために、王学を徹底的に清算しなければならぬ、とした。ここに鮮明な政治目的があった。錢穆は毛奇齡の「折客辯学文」の言葉を引いて言う、

往、史館に在る時、同官尤悔菴、題を鬪りて王文成の伝を得。總裁(陸隴其)、は伝の中に講学の語多きを惡み、駁して刪去せしむ。同官張武承(張烈)、遂に意を希いて極めて陽明を詆る。……

錢氏はこう論評した、「則ち張氏の『質疑』を著す動機は亦た見るべし。是くの若きの人才、是くの若きの心術を以て、相い與に鼓噪して正学を言ひ、帝王の欲を結ぶは固より餘有り。豪傑の氣を服するは則ち足らず。宜しく非難、蜂起すべきなり」(『中国近三百年學術史』卷上、二六七頁)と。この氛圍氣の中に、學術の討論より、むしろ政治の惡罵と攻撃が強まった。康熙帝は、この変化(朱子学、王学を兼採する傾向から朱子学を獨尊する傾向へ)を發見して強く非難した。

(康熙帝)曰く、頃ろ副都御史許三礼、原任の刑部尚書徐乾学を参題し、原任の礼部尚書熊賜履を薦挙す。往者、皆熊賜履好からずと言ひ、今、朕の起用を見て又た熊賜履好しと言ふ。……且つ熊賜履作る所の『日講四書解義』、甚だ佳し。湯斌又た然らずと謂う。此れを以て之れを觀れば、漢人の行徑は殊に恥ずべしと為す。況や許三礼、湯斌、李光地、俱に王守仁の道学を言うをや。熊賜履は惟だ朱熹を宗とし、伊等の學問と同じからざるなり」と。大學士王熙、奏して曰く、「道学の人、当に性情を涵養すべき、若氏各々門戸を立て、各々意見を持ち、互相に陥害し、結讐すれば、何を道学と云う」と。上(康熙帝)曰く、「意見、若し能く持久すれば、亦た自ずから妨げざるなり。

但だ、之を久くして彼自ずからその説を變易するのみ」と。(康熙起居注)二十八年九月十八日)

ここで、康熙帝は、この三人の「王守仁の道学を言う」者に対して、不満があり、また容認できると示したが、崔蔚林の教訓により、皆強い恐怖感があった。だから、大多数(1)の学派の知識人は朱子学を学ぶ道へと進んだ。しかし、康熙帝は「その説を變易す」る者をも非難した。(3)の学派の者は両難の窮地に陥った。

以上、康熙帝は在位六十一年間、特に成年以降、ずっと朱子学を尊重した。このような情勢の中に、本来の心学及び心学から変った、また心学色のある学説は存在できなくなった。つまり心学の終焉——その最終段階が到来したのである。しかし、雍正帝の登場によって、また変化が起きた。次に雍正朝の心学の状況を述べてみよう。

四、心学の餘光

雍正帝が彼の父親康熙帝の没後に即位してから形勢は變化した。雍正帝の「大統に繼ぐ」ということをめぐっては、様々な議論があるが、彼は不当の手段で皇位をかすめ取っており、正統ではないというのが一般的な見方である。本来清朝が中国を支配することも正統ではないという意識はまだ漢民族の間に消えていなかった。雍正帝の即位は二重の意味で非正統とみなされた。これは雍正六年九月の曾静の反滿事件によって更に激化された。この反滿事件の思想は康熙時代活躍した思想家呂留良からであり、呂氏は朱子学者である。康熙帝は、朱子が秩序論を訴え、だから朱子学が安定性のある、安心できる思想と思つたが、結局、朱子学は反滿思想家に利用された。呂留良が朱子学の旗をあげて「夷夏の防」の理論を高揚したことは、大きなショックを与えた。呂留良は『四書講義』の中で、「子貢曰く、管仲仁者にあらんや」(『論語』憲問篇)の文章をめぐって次のように分析している。

聖人のこの章、義旨甚だ大なり。君臣の義、域中の第一の事、人倫の至大なり。……「管仲微りせば」の句を看れば、一部の春秋の大義、尤も君臣の倫より大にして、域中の第一事たるものあり。故に管仲以て死せざるべきのみ。原より是れ節義の大小を論じ、是れ功名を重ぜざるなり。(『四書講義』卷十七)

「君臣の義」を強調して現在の秩序に服従するようにうたっている滿洲支配者にとって、「君臣の倫より大にして、

域中第一事なるものあり」という論調は何より大きな敵であり、最も危険な思想である。曾静の著した『知新録』では、呂留良の言い方より更にはつきりと主張されている。彼は、孔子が管仲を許すのは、「盖し華夷の分を以て君臣の倫より大にす」(『大義覺迷録』卷二に引く)と言う。これに対して雍正朝の儒臣の書いた『駁呂留良四書講義』は、「域中の義、君臣より大にすること莫し」(『下論』の巻を見る)と主張する。引き続き、「管仲、齊桓公を輔佐して楚の国を伐ち、楚人は帖服して盟を受く」と述べる。管仲が、「公子の傅」から桓公とともに周天子の尊を守ることは「君臣の大義」(同前)の爲である。しかし、管仲は齊桓公を輔佐して南征して楚を伐つだけでなく、北に山戎を伐ち、西征して白狄の地を攘うこともある。だから、「管仲微りせば、吾れそれ髪を被り衽を左にせん」(『論語』憲問篇)と。朱子の註には、「被髮、左衽は夷狄の俗」と言った。夷狄に關して『公羊伝』には、「南夷と北狄と交わり、中国、絶たざること線の若き」(僖四年)とある。雍正帝の儒臣らが、「北狄」を避けて「南夷」だけを論じるのは、政治色が鮮明に出たものであろう。このように呂留良らは、朱子学を利用して滿洲支配者に反対し、逆に儒臣らは朱子学を利用して滿洲支配者を擁立し、朱子学は權威性を失った。これらの事情について荒木見悟先生はこう述べている。

ここには、在野の朱子学と御用化した朱子学との対立という注目すべき現象があり、この反駁書に見られる朱子学の後退現象、もしくは鈍麻現象を考察することによって、雍正帝時代の一端と、雍正帝の思想を探ることが可能であろう。(『陽明学の開展と仏教』二七七頁、研文出版、一九八四年七月一五日)

また、天の原意志が呂留良思想の核心であると分析して、次のように述べている。

留良思想の核心となった天の原意志が国家権力によって押しつぶされるとともに、朱子学そのものも形骸化して行かねばならなかったのである。(同前、二九一頁)

この御用化から形骸化への変化は深い意味を持った。実に雍正帝は彼の父親のように朱子学を尊崇してはいない。彼は諸大臣の『駁呂留良四書講義』の刊刻請求について次のように言った。

朕、以らく、逆賊の犯す所は、朝廷の大法なり。諸大臣の駁す所は、章句の末学なり。朕惟だ至公を秉ち、以て法を執り、而して著書者の醇と為し疵と為すと駁書者の或は是或は非に於いて、悉く天下の公論、後世の公評を聴

く。朕、皆之を置いて問わざるなり。（『駁呂留良四書講義』上論）

つまり、雍正帝は、「朝廷の大法」或は清朝の支配を心配するだけである。そのほか、「章句の末学」であり、朱子学を尊崇することをも含めて全部大切な事ではない。「章句の末学」というと、勿論、『四書講義』と『駁呂留良四書講義』の中での王学を批判することも「章句の末学」になるのである。『駁呂留良四書講義』の中では、陸王心学に対して寛容な態度をも示した。この局面では、心学が存在できる可能性を与えた。

一方、雍正帝は仏教を重視し、「三教の民を四海に覚えるや、理、同じくして一源に出ず。道、並び行なわれて悖らず。人、惟だ能く豁然として貫通せざるのみ。是に於いて、人、各々心を異にし、心、各々見を異にす」（『文献叢編』第三輯『清世宗関於佛学之論旨』）という。朱子学者らは陸王心学を批判する時、多くの場合、禅として攻撃する。朱子は陸象山の聖賢説に対して、「他の意思を見るに只だ是れ禅」（朱子語類、巻百四）とし、そして「陸子静の学ぶ所は分明に是れ禅」（同前、巻百十六）と指摘した。明の羅欽順は、「象山の学」、「禅に非ずんば何と謂わんや」（『困知録』巻二）とし、陳建は、陽明の学は「一字も仏を源とせざること無し」（『学菴通辯』巻九）とした。『王学質疑』に寄せた陸隴其序には、陽明の良知は「是れ仏老の糟粕なり」とあり、張烈自序にも、陽明は「儒仏合一、祇だ其れを成して仏と為す」と非難した。雍正帝は、「三教帰一」、「理、同じくして一源に出ず」、「道は並び行われて悖らず」とし、朱子の論争を含めての道学を「章句の末学」とするから、陸王心学に対する圧迫も緩和した。以上の歴史的情勢の中で李紱（穆堂）は最後の心学者として登場する。

李紱に関して梁啟超は、「明末、王学の全盛の時、王学を追随した人物に対しては、私達は甚だ嫌悪感を覚える。清の康雍の間、王学が皆の攻撃的と為った時、毅然として王学を以て自任する者があれば、私達は極めて崇拜しないわけにはいかない」（『中国近三百年学術史』第五章）と褒めた。梁啟超は李紱の個人的品格を高く評価して「清朝の陸王学派にはまだ人物があるが、程朱学派には絶対ない」（同前）と判定した。錢穆は、『中国近三百年学術史』（商務印書館、中華民国二十六年五月初版）の中で、李穆堂の為に一章を設けて「磊落俊偉、光明簡切」として「有清一代の陸王学者の第一の重鎮」（該書、第七章）と誉めた。最近、石田和夫氏は、李紱についての優れた論考『清儒李穆堂』（『日本中国学会報』第四十一集）を発表している。以上の研究の結果を踏まえて心学の終焉の必

然性について述べよう。李氏は康、雍、乾の三朝に歴任したが、彼が心学の旗を掲げたのは、雍正十年前後である。というのは、彼が進士になるのは、康熙四十八年三十二歳（一説三十四歳）の時で、五十九年に内閣学士になった。そして一年後解職された。この間に學術未熟であったのか、その學術的立場は、はっきりしない。とにかく、彼は心学を鮮明に宣言してはいない。彼の心学に関する代表的著作である『陸子学譜』、『朱子晚年全論』は、いづれも雍正十年の作であり、この時から李紱は陸王心学者として知られる。李氏心学の時代背景と条件は明らかである。雍正六年、曾靜——呂留良案が起き、雍正七年九月『大義覺迷錄』を刊刻し、雍正九年、『駁呂留良四書講義』を刊刻するなどのことは李氏心学との関係が深いであろう。彼も、「陳建、呂留良輩の如き、朱子を妄附し、著して謬書と爲し、陸王を詆諆し、堪忍すべからざるに至る」（『穆堂初稿』卷四十三「答雷庶常閱傳習錄問目」）を言う。これによって、李氏心学の存在条件が伺えるであろう。

石田氏は、李氏心学の「良知全恃すべし」をへ良知全くは恃むからずへ修正する」（前文、一九一頁）ことを「良知への信頼度は決して高くはない」（前文、一九二頁）と断じている。そして「五達道」（君臣、父子、夫婦、昆弟、朋友の五倫を指す）を權威化させたことは「権力の維持強化の具として利用された」（前文、一九三頁）と分析した。強大な専制政治の下で李紱は自ずから「五達道」の制限で良知の生命力を奪ったのである。

それだけではなく、呂留良らの朱子学は一つの朱子学の顔と言え、また雍正帝の儒臣らの朱子学も一つの朱子学の顔と言え、李氏の『朱子晚年全論』の朱子学の顔は三番目と言え。彼は、「蓋し世、止だ陸王の疵を摘す者有り、未だ朱子の疵を摘す者有るを聞かず。陸王の疵の多く、朱子のみ独り疵無きに非ざるなり」（『穆堂初稿』卷四十三、「答雷庶常閱傳習錄問目」）と慨嘆し、陽明の『朱子晚年定論』と同じようなやり口を繰り返し、『朱子晚年全論』を編集した。王陽明の「致良知」の説が天下に広まったのと比べ、李氏心学は陸王の説を繰り返すほか、新發明はほとんどない。また、雍正朝には、朱子学は、御用化から形骸化へと変化し、形式的に存在するだけであった。李氏が朱子学を陸王学に入れたことはむだな努力であり、心学派は内容だけでなく、形式的にも消滅したことを表したといえる。中央集権の専制主義の下で、知識人が政治家として登場して独立人格を守るのとは不可能である。ただ思想家としての知識人は、宋明の時代では、ある程度、独立人格を持っている。清時代、思想家として存在する余裕がなくて

皆、完全に王権の従属になった。その上に康熙、雍正の時代から、文字の獄が絶え間なく、知識人は現実から離脱して古典を整理する考據学へ歩み始めた。いわゆる「康乾盛世」から始まった「乾嘉学派」は著しい学術成果を収獲したが、思想の分野から見ると、学术界全体は無生氣の状況に陥った。

結 び

以上、「清朝前期の心学」をめぐって清時代の康熙、雍正二朝の学术界の状況に触れた。しかし、これは二帝の全面的な分析ではない。この二帝に関する著作、論文及び資料は非常に多い。特に近年、レベルの高い研究が増加している。この二帝の勤勉さ、そして治国の業績は別の場面で検討しなければならぬ。ただし、前に述べたように歴史人物は歴史条件を越えることがなく、二帝は俱に異民族として中国を支配したのである。この過程に大切なものは、軍事の優位性と文化の劣等感という二重性格である。平和が来ると共に文化の劣等感は徐徐に深まって、支配者は綱紀を肅正して異端を取締まる政策を導入した。本論で見た心学の終焉もこの結果である。

今日、満洲族は中国における多民族の一つであり、今日までの歴史を客観的に研究するのは、意味深いことである。というのは、満洲族は中国の歴史上、主役として二回登場した。この二回の登場は、経済にしろ、政治にしろ、思想にしろ、文化にしろ、血と火そして血と涙が混った歴史であった。特に清時代の二百七十年近く中国を支配した歴史は、文化の結合の歴史であり、苦痛なる歴史であった。この結合の中に、満洲族は自分の文字、習慣を遺棄して民族の名称だけを残した。現在、清時代の歴史を研究する時、満洲族の文字を知る人は甚しく少ない。一方漢民族の圧迫された思想文化は長時間停滞して前進しない。アヘン戦争の直前、龔自珍のような有識者は「万馬齊瘖」のような恐ろしい局面に直面して「我、天公を勧めて重ねて抖擻し、一格を拘まずして人材を降す」と呼びかけたが、国民の大多数は自覚無く、百年以上の暗黒時代に入り込んだ。

最後に思想史から考えると、清時代、心学が終焉し、また宋明理学全体が生命力を失って「乾嘉考據学」が主役として登場するのは、中国の伝統哲学が最終段階を迎えたものといえよう。これは中西文化が衝突する時、明白に表れ

た。その時から、先哲、先覚達は西洋思想を学びながら、これを中国に導入して中国近代史を開いた。

〔注〕

- (1) 拙論『王陽明思想の一考察』（九州大学中国哲学論集、第十七期）を参照。
 - (2) 拙論『王陽明思想の展開と明末の社会』（九州中国学会報、第三十卷）を参照。
 - (3) (2)と同じ。
 - (4) 明の投降した將軍吳三桂、尚可喜、耿精忠の乱を指す。
 - (5) 羅爾綱著『綠營兵志』九〇十頁（中華書局、一九八四年第一版）所収の、三藩事件時の、八旗兵の戦力に関する資料を参照。
 - (6) この戦争時間は雍正七年二月から十二年であった。
 - (7) 鹿継善の言葉は『明儒学案』巻五十四、諸儒学案下二を参照。原文は、「吾輩讀有字的書、却要識没字的理、理豈在語言文字哉」。
 - (8) 湖南省永興県の人曾靜が、その徒張熙をして、書を当時の陝西総督岳鍾琪に投ぜしめ、反滿運動への蹶起を慫慂したこと。
 - (9) 最近出版された楊英傑氏の『清代滿族風俗史』（遼寧人民出版社、一九九一年九月第一版）には、滿洲族は、唐時代の渤海国を含めて三回政權を樹立したと主張する。（該書、二〇三頁）。渤海国に関しては、いろいろな論説がある。この説は成立しても、渤海国は中国の中心部の主な政權ではなく、一つの遠い辺境地方政權として存在した。主役とは言えないであろう。
- 〔補注〕 梁啓超は清朝の乾隆期までの學術を破壊的方面と建設的方面に分けた。破壊的方面については次の五つ。(一)、程朱を後ろだてにして陸王を破壊する（陸隴其、稼書）。(二)、王学だけでなく、宋学全体を攻撃する。（表面上、王学を擁護する）（毛奇齡、西河）。(三)、朱学に接近して王学末流を攻撃する。（顧炎武、亭林）(四)、宋学全体を総攻撃する。（費密、燕峰・顔元、習齋）。(五)、程朱の解經方法を攻撃する（惠棟、定宇）。建設的方面については次の六つ。(一)、王学を繼承する。（孫奇逢、夏峰）。(二)、王学を発明する（黄宗羲、梨洲）。(三)、程朱を尊敬する。（顧炎武）。(四)、朱を非とし王を非とする（王夫之、船山）。(五)、程朱を尊崇し、その学を海外に伝える（朱之瑜、舜水）。(六)、朱に反し王に反す（顔元、習齋）。（『飲水室合集』專集第二十四册「儒学哲学」第五章「二千五百年儒学変遷概略」下）